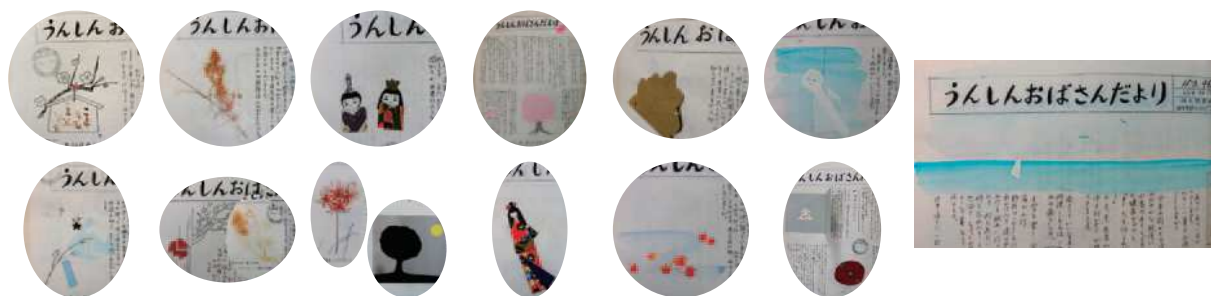


# 法政大学 大原社会問題研究所 環境アーカイブズ ニューズレター

創刊号  
2015

## CONTENTS

創刊の辞 (原伸子) … (2) / 環境アーカイブズの成り立ち・所蔵資料の概要 … (3) / 環境アーカイブズの拡がりを目指して (清水善仁) … (4)  
資料紹介 … (6) / 視線のアーカイブ (松下優一) … (7) / 2015年活動報告・利用案内 … (8)



### 地球規模から隣の地域まで。人々の活動の記録, 'ミニコミ誌'

上: 反核パシフィックセンター編『月報反核太平洋パシフィカ』の表紙。核実験と対比する南太平洋の子供たちの笑顔が印象的。  
[1990-97年までを所蔵] / 下: 福生市公民館運営審議会の佐久間登世子氏が発行していたミニコミ誌「うんしんおぼさんだより」には四季折々の手作りモチーフが添えられている。[1982-86年までを所蔵] (環境アーカイブズRA 鄭ゆくちや)

# 創刊の辞

法政大学大原社会問題研究所

所 長 原 伸 子

旧サステナビリティ研究教育機構（略称、サス研）は2009年8月から2013年3月末までの約3年半の間に、研究プロジェクトと事業プロジェクトにおいて学内外に大きな足跡を残しました。2011年3月11日に日本は東日本大震災という未曾有の災害を経験したのですが、それは、ポスト震災後の日本社会をどのように復興するのか、そして私たちはどのように生きるのかという、学問的な領域を超えた重要な課題を提起しました。まさにサス研の「レゾン・デートル」を問う研究が求められることになったのです。しかしサス研は、設立の経緯からして学外の大型助成金を必要とするものであったことから、その活動は2012年度末に終了しました。そして事業プロジェクトの中核であった「環境アーカイブズ」は2013年4月1日より大原社会問題研究所「環境アーカイブズ」として再出発することになりました。

大原社会問題研究所は、倉敷紡績の事業を営む大原孫三郎によって1919年に大阪天王寺に設立されました。大原孫三郎は大阪の石井記念愛染園における貧困児童の救済をはじめ社会事業に熱心に取り組んだのですが、社会問題の解決には慈善事業には限界があること、真の解決のためには根本的な調査・研究が必要であるという趣旨のもと、大原社会問題研究所を設立したのです。その理念は今も大原社会問題研究所の活動の柱として大切に守られています。社会労働問題研究の対象である労働市場、家族生活、社会保障などは、本来、自然環境、社会環境が形作る私たちの生活を

支える社会的装置の一部です。宇沢弘文はそれを、市場原理では説明が困難な「社会的共通資本」と呼びました。私たちが21世紀に直面しているのはその「社会的共通資本」の危機なのではないでしょうか。

アーカイブズは、歴史的経験の貴重な記録を保存・整理・公開することによって歴史的記憶を社会に発信し共有する社会運動でもあります。大原社会問題研究所と「環境アーカイブズ」の統合から3年がたちました。この間、「環境アーカイブズ」は二つの国際シンポジウム「市民活動記録管理の現状と課題」（2013年11月28日）と「境界地域における『国民統合』過程と人々の意識—日本とアジアを中心に—」（2014年11月29日）を開催するとともに、大阪人権博物館の企画「薬害を語り継ぐ～サリドマイド、スモン、薬害ヤコブ～」(2015年10月17日－12月19日) に対して資料の貸し出しと企画実施への協力を行うなど、着実な成果を残しております。このような成果は、「環境アーカイブズ」のスタッフの皆さんの努力と、「環境アーカイブズ」に資料を寄託・寄贈していただいた方々、またその活動を応援していただいた学内外の皆さんのご協力の賜物です。

そして、このたび「環境アーカイブズニュースレター」が創刊されることになりました。「環境アーカイブズ」の活動を広く社会に知っていただくとともに、学内外の皆様から広くご意見を賜り、「環境アーカイブズ」の活動のより一層の充実につながることを心より願っております。

## 環境アーカイブズの成り立ち

- 2009年 8月 法政大学サステナビリティ研究教育機構のプロジェクトとして「環境アーカイブズ・プロジェクト」が発足。
- 2010年 4月 担当教員として金慶南准教授が着任。法政大学多摩キャンパスに環境アーカイブズ作業室を設置。
- 2011年 4月 サステナビリティ研究教育機構の「震災・原発問題タスクフォース」の一環として、原発および震災に関する文書・映像資料の収集を開始。  
※なお、本タスクフォースでは別のプロジェクトとして、岩手県陸前高田市議会公文書のレスキュー活動を実施。
- 2011年12月 環境アーカイブズ資料公開室がオープン。記念シンポジウム「現代における環境アーカイブズの社会的役割と意義」を開催。



環境アーカイブズ資料公開室オープン記念シンポジウム

- 2013年 4月 サステナビリティ研究教育機構の閉鎖にともない、大原社会問題研究所に統合、「大原社会問題研究所環境アーカイブズ」となる。
- 2015年 4月 金慶南准教授の退職にともない、新たに清水善仁准教授が着任。

※現在の体制（2015年12月時点）：担当教員1名、リサーチアシスタント6名、臨時職員2名

## 所蔵資料の概要

環境アーカイブズが所蔵する資料は、次の5つに大きく分類されます。

### ①薬害関係資料

薬害事件にかかわって作成・収集された資料群  
… 薬害スモン関係資料、サリドマイド事件関係資料

### ②環境保護・開発反対問題関係資料

環境保護運動や大型開発事業の反対運動にかかわって作成・収集された資料群  
… 自然の権利資料、徳山ダム建設反対運動資料

### ③原子力問題・反原発運動関係資料

反原発運動団体等の活動のなかで作成・収集された資料群  
… たんぽぽ舎反原発資料

### ④公害関連資料

地域における公害問題等に関する資料群

### ⑤市民活動一般に関する資料

市民活動団体がその活動のなかで作成・収集した資料群  
… 東京都多摩社会教育会館市民活動サービスコーナー所蔵資料

※環境アーカイブズには、この他にも研究者から収集した資料等、多数の資料群を所蔵していますが、整理作業中の資料群については明記しておりません。ご了承ください。なお、すでに公開している資料群とその概要、および資料目録については、環境アーカイブズのホームページに掲載されていますので、ぜひご覧ください。



# 環境アーカイブズの拡がりを目指して

法政大学大原社会問題研究所

准教授 清水善仁

## 公害の資料を未来へ

2015年12月11日から13日にかけて、三重県四日市市において「第3回公害資料館連携フォーラムin四日市」が開催された。われわれ環境アーカイブズは、本フォーラムの主催団体である公害資料館ネットワークに加盟しているので、その関係で私もはじめて同フォーラムに参加した。四日市市の会場には100名を超す参加者がおり、公害教育や企業との協働の在り方等について熱心な議論が展開された。私はかねてから資料保存の問題に関心があったので、公害資料の保存・活用についての分科会に参加したが、そこでは、二度と同じような公害の悲劇を繰り返さないために、その記憶を伝える資料の存在を重視し、これを将来世代に引き渡していくための取り組みについて話し合われた。ここに集ったのは、公害に関する資料を未来につなげていこうという、老若男女を問わない全国の資料館や団体等の人々である。公害資料の収集や整理、公開をめぐる多くの課題があるが、皆で知恵を出し合い、皆の実践を共有することで、よりよい資料の継承の在り方について議論された。公害資料の保存のために汗を流す人々がこんなにもたくさんいるのだと、私はあらためて資料が持つ〈力〉<sup>ちから</sup>のようなものを感じずにはいられなかった。

## 資料を伝える努力のなかに

資料には、さまざまな価値がある。人間の生きてきた証しとして、地域の歴史を映し出す鏡として、みずからの権利を主張する根拠として、ある事象の解明のための研究素材として——多様な価値を有するからこそ、資料は残されなければならない。現代を生きるわれわれには、過去から伝えられた資料と同時代の資料とを保存して、未来の世代に残していく責務がある。そのことをとりわけ痛感したのが、2011年3月11日の東日本大震災であった。この震災の後、多くの機関や団体が被災資料のレスキューに入り、またデジタル・アーカイブをはじめとする

資料保存の活動を始めた。これらは現在でも続いているものが少なくない。それは、資料を残すこと、資料を伝えること、資料を共有することの意義を認めた多数の人々がいたからである。過去を忘れないために、いまできることは何かを考えるために、そして未来の教訓とするために、いまを生きるわれわれは資料を伝えるための努力を続けているのである。

環境アーカイブズも、資料を伝えるそのような人々の努力の一端を担いたいと考えている。2009年8月、当時の法政大学サステナビリティ研究教育機構のプロジェクトとして、環境アーカイブズは発足した。生みの親とも言える船橋晴俊は「資料があるかないかで、全然物事の見方は違ってくる。資料がなくなってしまうと、歴史は書き換えることはいくらでもできます」(『〈第13回サス研フォーラム講演記録集(13)〉環境アーカイブズとサステナビリティの探求』法政大学サステナビリティ研究教育機構発行、2011年、35ページ)と述べているが、船橋が自身の環境社会学研究のなかで確信した資料の価値と重要性への認識が、環境アーカイブズを生み出したといえる。われわれの目的は、とくに環境問題やそれに関係する市民運動等で作成・収集された資料の整理・公開を通して、環境にかかわる資料の保存と、資料が伝える記憶の継承の担い手となることである。

## 環境アーカイブズのこれまでとこれから

環境アーカイブズの発足から現在に至るまで、主たる活動の中心は収集した資料の整理と公開である。アーカイブズという言葉には、①記録資料、②公文書館等の施設、③記録資料の整理・保存・公開等の機能、という3つの意味があるが、資料を整理して公開することが、何よりも第一に取り組むべき課題であった。環境アーカイブズが所蔵する資料の概要は本誌3ページに記した通りだが、整理にあたっては1点ごとの目録作成を基本とし、可能な範囲で資料の修復や劣化防止の措置をとっている(右写真)。すでに一部の資料は公開しており、法政大学多摩

キャンパスの環境アーカイブズ資料公開室において実際に閲覧することができる。

その他にも、2015年4月には規模は小さいながらも映像展示「アーカイブズと震災～25年前のフクシマの姿～」を開催し、多くの学生や教職員の観覧を得ることができた。外部機関が主催する展示会への資料貸出や環境アーカイブズへの見学者も増えてきており、少しずつではあるが環境アーカイブズの存在が知られてきたのではないかと思う。

しかし、こうしたままでの取り組みに満足することなく、さらに活動の幅を広げていきたい。例えば、環境アーカイブズが所蔵する資料の教育利用への支援がある。環境問題や市民運動にかかわる原資料や映像には、資料それ自体が物語る〈力〉がある。それらに学生が直接接触することは、当該事象をより深く理解する上でも効果的であると考えられる。また、われわれと同様の資料を所蔵するアーカイブズ機関等との連携を通して、資料の整理や公開に関する情報交換はもとより、環境アーカイブズのアウトリーチ活動を積極的に展開していきたい。

そして、このような活動計画の一環に、本ニュースレターの刊行がある。ウェブによる広報だけではなく、ニュースレターを作成し幅広く手に取っていただくことによって、より多くの方に環境アーカイブズの資料と活動を知ってもらうことが本誌刊行の目的である。今後、年1回のペースで刊行していく



ミニコミ資料劣化防止作業

予定であり、本誌を通したさらなる交流の拡がりを期待している。

## 環境アーカイブズは時空を超えて

日本のアーカイブズ学の発展に中心的な役割を果たしている安藤正人の言葉に「アーカイブズ思想」というものがある。アーカイブズは現代社会のなかで“時間を超えて人をつなぐ架け橋”と“空間を超えて人をつなぐ架け橋”の2つの役割があるという(安藤正人「本書の課題」、安藤正人・青山英幸共編著『記録史料の管理と文書館』北海道大学図書刊行会、1996年)。安藤はアーカイブズをまさに時空を超える存在として位置づけている。

私は、環境アーカイブズもこうした存在を目指したいと思っている。環境アーカイブズが所蔵する資料に記された内容からは、さまざまな課題や困難に直面した過去の人々の想いや行動を知ることができるし、それを現在の運動や未来の人々の営みに生かすことも可能となろう。また、ネットワーク技術が発達した今日、そうした情報の交換や獲得はもはや場所を問わない。世界のどこにいても、環境アーカイブズにアクセスすることができる。だからこそ、環境アーカイブズは過去と現在と未来とを結び、異なる場所をつなぐ存在たりうるのである。

環境アーカイブズの発足から6年、われわれは今後も資料の整理や展示等の活動を通して、資料の利用提供はもちろんのこと、資料の持つ意義や魅力を広く伝えていきたいと考えている。そうした活動の蓄積が結果として、環境アーカイブズはもとより、アーカイブズそのものへの認識を広げることにもなると確信している。これからの環境アーカイブズの活動にご注目いただくとともに、皆様の厳しくもあたたかいご指導ご鞭撻をお願いする次第である。

## 資料紹介

### 【0042 東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー所蔵資料（ミニコミ）】

環境アーカイブズでは、様々な市民活動団体や個人が自主的に発行した印刷物（「以下、ミニコミ」）を所蔵しています（2011年12月寄託、2015年3月寄贈）。

当資料室では、「市民活動サービスコーナー（1972年東京都立多摩社会教育会館に開設、2002年廃止）」が収集していたミニコミのうち、1965年から2002年の間（一部の資料については2004年まで所蔵）に発行された4,667ファイルを所蔵しています（なお、これ以降に発行されたものは、東京都立川市にある「市民アーカイブ多摩」で引き続き収集・保存・公開を行っています）。現在、Web上に目録を公開し、閲覧利用が可能な資料は、3,775ファイル（2015年12月現在）ですが、近日中にすべての目録を公開する予定です。

さて、資料の内容に着目してみると、「社会教育・生涯学習」「女性問題」に関連するミニコミを多く見ることができます。これらの作成方法は様々で、たとえば手描きのマンガやイラスト、それらに絵の具や布地で装飾を加えたものなどがあります。また、環境アーカイブズの所在地の周辺地域（東京都八王子市、日野市、立川市など）が発行しているミニコミなども所蔵していますので、普段通勤や通学で利用している地域の新たな発見をすることができます。

今後、地域研究やメディア研究などの分野で、ミニコミを用いたさらなる研究の展開が期待できるでしょう。

（環境アーカイブズRA 野口由里子）



福島第一原発全景（1990年1月）

### 【0014 たんぽぽ舎反原発（その他）映像資料】

たんぽぽ舎反原発（その他）映像資料は、反原発運動を行う市民団体、たんぽぽ舎が収集、制作した映像を集めたものです。たんぽぽ舎はチェルノブイリ原発事故を受け、東京の公務員や市民が中心となり、1989年に設立されました。本映像資料には、反原発・自然エネルギーなどに関する講演、集会、学会などの様子を映した映像のほか、原発やエネルギー問題に関するドキュメンタリー、報道番組などが収集されています。

2010年に寄贈された本映像資料のなかに、東京電力の福島原子力発電所（第一、第二）やその周辺の様子を映した映像も残されていました（ファイルNO.0416「福島第一原発／第二原発／エネルギー館」写真）。1990年1月に撮影されたもので、1989年1月の福島第二原発での原子炉再循環ポンプ部品損傷事故を受け、設立当初のたんぽぽ舎の目が福島に注がれていたことがわかります。カメラはまず福島第二原発とその近隣海岸および住宅を映しています。その後車で移動して福島第一原発の様子も映し、さらに近くのBWR運転訓練センター、そして福島第二原発エネルギー館のなかの様子を映し出しています。カメラが映した場所は2011年3月を境に大きく変わりました。2015年12月現在、事故で建屋が破壊された第一原発の辺りには汚染水タンクが所狭しと置かれ、撮影した地域への立ち入りも自由にできる状況にはありません。この映像は事故前の福島原発周辺の様相がわかる重要な資料と言えます。

（環境アーカイブズRA 西田善行）

## コラム

## 視線のアーカイブ

～赤城修司『Fukushima Traces 2011-2013』（OSIRIS, 2015年）について

環境アーカイブズRA 松下優一

第7回大原社研シネマ・フォーラム（2015年12月2日、法政大学多摩キャンパスエッグドーム）は、福島市在住の赤城修司氏を迎えて行われ、筆者も大変興味深く拝聴した。赤城氏は、高等学校美術教員の傍ら、3.11以後の福島で生活の場に刻まれた放射能汚染の痕跡をテーマにした写真を撮り続けている。Twitterにアップロードされる写真は注目を集め、2015年3月には『Fukushima Traces 2011-2013』と題された写真集が刊行された。シネマ・フォーラムでは、福島の現状を記録・伝達するという実践と地域に暮らし働くこととのあいだで感じておられることについて率直なお話を伺えたように思う。

写真集には2011年から2013年のあいだに主に福島市内で撮影された約140枚が収められている。地面に残る高圧洗浄機の跡や、市内のあちこちに表示される「がんばろう福島」のメッセージ、商品として売られる各種除染グッズ、撮影者持参の線量計が高い数値を示す道路の窪み、各所で行われている除染作業とその脇を通り過ぎていく人々の姿、伐採された樹木や表皮をはがれた樹木、そして住宅の軒先や農地や公園の遊具の向こうに置かれた汚染土を覆うブルーシート…。今更ながらそこで暮らす人々にとっての日常生活の空間が被ばくし除染の舞台になっているという事実にとじろいでしまう。

「正しい伝達なんて存在しない」と題された写真集のあとがきには、次のような一節がある。「震災後の人々の動きを思うとき、僕は、素人のサッカーをイメージする。人々は、転がったボールを必死で追いかける。次から次へと場所を変えるボールに皆が集まるから、手薄な場所がたくさんできる」(p.164)。人々の関心が目先の利益や大きな事件をめぐる移動することで生じる「手薄な場所」。社会的関心についてのこの卓抜な比喻は、おそらく撮影者の視線がこの地域のどこに向けられているのかについての説明でもある。マス・メディアの表象回路には乗らな

いような、集合的な関心を外れた「手薄な場所」こそ、赤城氏のカメラが捉えようとする3.11以後の福島の日常（あるいは「日常の中の非日常」）なのである。

いうまでもなく放射能は目に見えず、放射能汚染という事態もまた捉えがたい。樹木や土地の表面に刻まれた除染の痕跡は、時とともに消える。たとえ残っていたとしても、人々がそれを認識し、関心に向けられるかどうか極めて疑わしい（例えば筆者には地面を這うくねくねとした線が高圧洗浄機の跡であることも説明がなければ分からない）。だからこそ、それを把握し残す実践には大きな意義が生まれる。赤城氏はこう書いている。「被写体として選んだものが30年がたち、50年たってどんな価値や意味を持っているか、もちろん僕にはわからない。非難の対象となる可能性だって十分高い。それでも僕は、誰かが僕の視線をたどってくれることを夢見る。歴史の教科書には載らない視線が、保存されることを夢想する」(p.164)。その試みは、写真という映像メディアによって、3.11以後の福島という環境をアーカイブしようとする壮大な記録・保存実践となるにちがいない。

一枚一枚の写真に切り取られた光景は断片に過ぎない。しかしそこに3.11以後の福島を漂うリアリティの一端が宿っていることもまた確かだろう。じっさい撮影者の視線（およびキャプションの役割を担うツイート）をたどるうちに、個々人の感情とは無関係に作動するシステムの不気味さ（p.5-6、p.161）、目に見えないはずの放射性物質の存在感（その動きや濃淡）を感じ取ることができるはずだ（p.68、p.127）。写真を見ることで、見えない何かを見るための想像力が鍛えられるといえはいいだろうか。少なくとも筆者は氏の写真を通じて、3.11以後の福島の社会的現実を見るための手ほどき（視力のレッスン）を受けたように感じるのである。

## 2015 年活動報告

### ◆ 主な活動

4月8日～27日 映像展示「アーカイブズと震災～25年前のフクシマの姿～」

8月22日 市民アーカイブ多摩を訪問。

11月7日 大阪人権博物館(リバティおおさか)を訪問、「第17回薬害根絶フォーラム」に参加。

11月27日 「第30回社会・労働関係資料センター連絡協議会(労働資料協)定期総会・研修会」(於・大原社会問題研究所および環境アーカイブズ)。

12月7日 国立台湾大学のHwa-Jen Liu准教授、来室。

12月11日～13日 「第3回 公害資料館連携フォーラムin四日市」に参加。



大阪人権博物館における企画展の様子

### ◆ 資料貸出

大阪人権博物館(リバティおおさか)における企画展「薬害を語り継ぐ～サリドマイド、スモン、薬害ヤコブ～」(期間10月17日～12月19日)に資料21点を貸出。

### ◆ 新規資料公開

0012 たんぽぽ舎・反原発資料『技術と人間』

0013 たんぽぽ舎・反原発資料『たんぽぽニュース』

0014 たんぽぽ舎反原発映像資料

0031 東日本大震災・原発事故関係資料(雑誌・書籍)

### ◆ 2015年度中に新規公開される資料

0041 佐藤禮子・環境ホルモン・ダイオキシン等関連資料

0039 舟橋直子・野生生物保全運動関連資料



社会・労働関係資料センター連絡協議会見学の様子

## 利用案内

開室時間：平日9:00～16:30

土日祝日および大学が定めた休業日は、休室となります。また、夏季期間等に開室時間が変更になる場合があります。ホームページの「開室カレンダー」をご確認ください。

閲覧・見学をご希望の方は、事前に電話もしくはメールにて、来室日時をご予約下さい。

### 法政大学大原社会問題研究所・環境アーカイブズ

〒194-0298

東京都町田市相原町4342

法政大学多摩キャンパス総合棟5F

電話：042-783-2098

メール：k-archives@ml.hosei.ac.jp

ツイッター：@k\_archives1

ホームページ：http://k-archives.ws.hosei.ac.jp

82 大宮駅 JR埼京線快速—約32分 新宿駅 京王線準特急—約40分 めじろ台駅 バス—約10分

114 千葉駅 JR総武線快速—約39分 東京駅 JR中央線中央特別快速—約53分 西八王子駅 バス—約22分

25 八王子駅 JR中央線—約3分 西八王子駅 バス—約22分

28 町田駅 JR横浜線—約15分 相原駅 バス—約13分

62 横浜駅 JR横浜線—約13分 新横浜駅 JR横浜線—約36分 相原駅 バス—約13分

※■内の数字は、総所要時間(乗り換え時間を除く)を表す。★新横浜駅は経由で、乗り換えではありません。

多摩キャンパス

※法政大学公式ウェブサイトより転載